

【入選】

ずっと探していた

理学部 化学科3年 吉永悠希

平日昼間の館内には閑散としているとも賑わっているとも言切れない程度に人が行きかっていた。デパートともショッピングモールとも区別し難く、一消費者にとつてそれらは細事である。

その中に一人の少女の姿がふと目に入った。可愛らしい白のリボンが映える大人しい青色のワンピースをまとったその子は、五つか六つか、小学校にはまだ通っていないくらいに見える。ともすれば少女というよりも女兒という年齢かもしれない。

そんな年端の女の子が一人で歩いているのは、一瞬不自然に思う。ここは公園ではなく商業施設なのだから。人の往来は数えられないほどにある。その女の子の横を、何度頭より高い位置に腰が通り去っていったらう。

これでもし女の子が泣いていたならば、誰が見ても迷子だろうと思うはずだ。だがその子にそんな素振りはなく、短く小さな足を懸命に動かしてすたすた歩いている。あるいは周囲を不安そうに見まわしていたら違ったのかもしれないが、その子はあまりにもしゃんとしすぎている。

私だって、その姿に気が付かなかったかもしれ

ない。ただ、その子にどうしても見覚えがあった。私にはそのような幼い知り合いがいるわけではない。だからその子のことを知っているはずはない。そうではなくて、昔の知人に面影が重なった。その子は肩から下げたポシェットの紐を力強く握りしめて小さく歩く。その姿は、一見すれば健気にも見えるかもしれない。だが私はそれが不安の表れだと知っていた。

その日は少し遠い公園に連れてきてもらっていた。母と、幼馴染の由衣とその母親と。まったく知らない初めての場所にどきどきともわくわくともしていた。もしかしたら少し怯えていたかもしれない。だが繋いだ由衣の手はぎゅっと自分の手を離さず、自分よりも由衣の方が怖がっているのだと思えば、自分がしつかりしなければと身が引き締まる。

とはいえ母親たちも少し離れたところから自分と由衣とを見守っている。しばらくすれば特に恐れることなどない理解し、普段と同じように遊具の周りを駆けまわっていた。

何がきっかけだったかは覚えていない。その公

園は小さな身体の自分たちにとつては遥かに広く、遊具こそあれ周りをうつつそうとした茂みと木々々が囲んでいた。あるいは蝶々をでも追いかけて行つたのかもしれない。由衣はひざ丈のワンピースに、自分はハーフパンツに、それぞれむき出しの脚を雑草が引つ掻くことも構わずに奥へ奥へと進んでいった。

なにもそれだけであれば問題は無かった。そんな自分たちに気が付いた母たちが「こんなところに入っていつてどうするの」と優しく仕方のない顔で窘められていただろう。だがその時に、母たちの近くで男の子が転んでしまった。無論その男の子の母親だつてすぐに駆けつけるが、膝を大きく擦りむいたその子は大声を上げて泣いてしまうのも無理はない。ともすれば、子どもの泣き声が聞こえればそれが知らない他人の子供であっても無視はできないだろう。

泣きじゃくる男の子に気を取られて、母たちの意識は自分たちから離れた。そして自分と由衣とが茂みの奥に向かつていくのともまた同じ瞬間だった。だからこれはただ賽子の出目が悪かっただけの話だ。

きやいきやいともしやぎながら自分と由衣とは茂みの奥に進んでいく。もし蝶々を追いかけていたのであれば、それが高く飛んでいき見えなくなってしまう、つまり自分たちが茂みを進む理由が失われたときになってようやく気付く。さて、ここはどこなのだろう、と。

これが近所の公園であれば、何も心配すること無かった。どうせこのような外れの茂みにだって何度となく足を踏み入れており気にすることは無かっただろう。だが周りを見渡しても目印になるようなものは何一つなかった。黒茶の地面は僅かに湿り気を残し、背の高い無数の木が陽の光を遮りながら自分と由衣とを睨んでいる。見渡す限り同じ景色が自分たちを閉じ込めている。自分たちの脛に引つかかる雑草が急に痒く感じた。そうしてようやく自分たちの置かれた状況を理解した時に、しまい込んでいた恐ろしさが込み上げてきて、それに吞まれてしまった。

隣に居た由衣は両手でポシエットの紐をぎゅっと握っていて、その目は潤み今にも泣き出しそうだった。自分だって怖い。だが由衣が自分より怖がっているなら張らない見栄は無かった。

精一杯のやせ我慢をして、由衣の手を取る。「ママたちのとこに戻ろう」と、それがあかかも容易いことであるかのように自分は言った。きつと自分の声だつて震えていただろう。それでも由衣は自分の手を握り返してくれた。

由衣と手を繋いで茂みの中を彷徨う。整備のされていながたがたの土の上をたどどしく二人

で進む。こちらが来た道なのかは分からない。それでも不安を隠しきれない由衣を少しでも安心させるために進むしかなかった。

二人きりの孤独は時間を幾倍にだつて引き延ばしていたようで、まるで数時間は自分と由衣とで彷徨っていたような感覚だった。もしかしたらそろそろ由衣が泣き出してしまふのではと思いついた時、母たちの声が聞こえた。

母たちもすぐさまこの事態に気が付いていたから、事態が解決するのにそう時間がかかっていたわけではなかった。

自分と由衣とを呼ぶ声を辿って、されど転ばぬように木々の間を掻き分けていく。だんだんと自分たちの進む先が明るくなっていき、呼ぶ声もはつきり聞こえるようになる。

そして先に声をあげたのは由衣の方だった。ぱつと自分たちは手を離して視界に入ったそれぞれの母親の元へ駆けていく。

ようやく安心したのか、由衣は母親に抱き着いてしくしくと泣いていた。そのあまりの様子に母たちは驚いていた。自分たちにとってはずっと永くあのままだとも思う程だったが、事実としてはほんの数分のことだっただろう。だがそのことに気が付いたのか由衣の母親は由衣の頭をやさしく撫でて慰めている。

これはよくある話で、結末だつて何一つとして当たり前のものだった。

ぎゅっと握りしめられたその小さな手が、そう

して不安を堪え凌ぐ姿が幼い頃の由衣と重なった。近くに母親や父親がいるなら、あるいは自身の意志でこの場に居たならばあんなに不安がることはない。きつと、なにか些細なきっかけが重なつて親とはぐれてしまった。いつかの私と同じで、その寂しさを押し量るのはそう難しくない。迷子なんだと、そう思った。

その子の前までゆつくりと近づいて、長いスカート裾の裾に気を遣いながら腰をかがめた。そうすればその子も目の前の私に気が付いたようで、足を止めてこちらを見返してくれる。

「いきなりごめんね」

努めてゆつたりと話しかけた。垂れる自分の前髪を後ろに撫でつけて、その子の顔を覗き込む。

そうして見上げる小さな顔はいまにも泣き出しそうだった。ぱつちりとしたまつ毛とそれに見合う大きな目は潤み、いつ涙がこぼれてもおかしくないだろう。

どうしても目の前の女の子が私にはいつかの由衣に見えて仕方なかった。

「えっと、お母さんかお父さんか、はぐれちゃったりしたのかな」

自信なく遠慮がちにくくりと女の子は頷く。

「私は爽華、お名前聞いてもいいかな」

「……マイ、です」

「マイちゃんね。お母さんとはどこまで一緒だったか覚えてる？」

「えっとね、ママが電話するから待っててねって、でも、それで待ってただけで、アカリちゃんが

持ってたぬいぐるみが置いてあって、それで、いつの間にか、ひとりでも来たことないから、わかんなくて」

それは息継ぎをするように、言葉を連ねるたびに今にも泣いてしまうのではと思う程、涙の代わりに言葉が溢れているのではと、そう思った。

「そっかそっか、大丈夫だからね」

一度立ち上がってから肩掛けの小さい鞆からスマートフォンを取り出して、館内地図を確認する。アナウンスで迷子の情報はない。まだ母親も迷子センターには行ってないか。だがどちらにせよこの広い館内で母親を探し出すのは不可能だ。

と、考えているとマイは私のスカートの裾を掴んでいた。私の方を見ているわけではない。不安を紛らわせるために、無意識でそうしているのだろうと思う。何かを掴まずにはいられないそんなところまでマイは由衣に似ていた。

「じゃあ一緒に探しに行こうか、ね」

マイは「うん」と頷いて、でもまだ私のスカートを掴んだまま。それでは歩けないが、この子の手を空かせるのもあまりよくないと思った。

歩けないからスカートから手を離して、というのは簡単だが、いま不安に苛まれているマイの安心に少しでも繋がるならば。

「またはぐれたら大変だから手を繋ごっか」

差し出した私の手を、マイは素直に取った。自身の身長がさほど高いことをコンプレックスに感じることもある。けれどこうしてあげられるならば、私のこの身長もちょうどいいと思った。

迷子センターの場所はさつき確認して把握している。広い館内と言えど、動線がしっかりしているので程なく私とマイとは目的地に着いた。ちよつと待っててね、とマイに声をかけてから受付にすみませんと声をかける。

これだけの大きな施設であればやはり迷子も珍しいものでもないのだろう。すぐに担当の人間が現れて、「あとはこちらでお預かりします。ご協力ありがとうございます」と。

ならば私にこれ以上できることはない。この子の身の安全は彼らが保障してくれるし、迷子のアナウンスが流ればほどなくして親が駆けつけることだろう。

私は改めてマイの前にしゃがみ込んで、その小さな手を両手で包む。

「この人たちがお母さんを今から探してくれるからね、大丈夫、すぐに迎えに来てくれる。だからいい子で待ってるんだよ」

マイはうんと言って頷く。やつぱりこの子は聞き分けの良い子だ。受付に向き直って「じゃあ、あとはよろしくお願いしますね」と、その場を後にしようとしたがそうはいかなかった。マイの小さな手が私のスカートを握って離さない。そつと微笑んで「どうしたの」と問いかける。

までもなかった。その潤んだ瞳と崩れかけた小さな表情が全てを物語っていた。

気づいた迷子センターの対応者が、お姉さんが困ってしまうから、と言いかけたが、手を仰いで制止した。

「ごめんね、大丈夫。お母さんが来るまで一緒にいてあげるね」

そう微笑みかけると、マイは不安が和らいだのか小さな表情が少しほころぶ。

少し意外だった。ついさつき会ったばかりでここまで懐かれるものかとは思ふ。だが私の存在がこの子を安心させられる一助となるならば、母親の到着までは一緒に居てあげたかった。

そんな、すみません、と迷子センターの担当者が出た。

「いいんです。特に用事ありませんから。それにこの子もそっちの方が落ち着くみたいですし」私はきつと、マイに由衣のことを重ねてしまっている。だからマイのことを気にかけてしまう、放っておけない。そんな自身の浅はかさを理解していないわけではない。

マイの興味はどうやら私のピアスにあるようで、女の子であればそういう年頃だろう。かくいう私もこれくらいの頃からこういうものが好きだったなと思いついた。桜をあしらったピアスは金色の金具と相まって、控えめながら分かりやすくかわいい。

せつかつくなので、鞆にしまっていた桜のヘアピンを渡すと、これも気に入ってくれたようで、しげしげと見つめている。私の作品の中で個人的にも気に入っているから、こうして素直な小さい子にも気に入られるのであれば、相当に嬉しいものだと思った。

程なくして母親が来た。まだアナウンスはか

かっついていないから、きつと事態に気が付いて迷子センターを頼りに来たのだろう。それに真つ先に気が付くのは当然マイで、見かけたとたんに立ち上がって「ママ！」と声をあげて駆けていく。

視線の先、マイが抱き着いた女性は私と同年代くらいで、この年の子供が居れば当然と言ったところか化粧や服装も落ち着いている。

「マイ！よかった……心配したんだから」

マイを抱きしめ頭を優しく撫でる母親はこちらを見やる。娘が世話になった人間は誰かと、それだけの動機だろう。マイにも遺伝したであろうそのはつきりとした目がこちらを見た。

その虹彩を、その声色を、私は知っていた。

その母親が由衣だと、直感した。

時の流れというのは残酷だった。のうのうと日々を過ごすだけで気が付けばもう自分たちは中学二年生にまでなっている。そうすればこれまでの関係性は次第に変化してしまうのは当然で、自分と由衣とだってそれは例外ではなかった。

小さい頃はずっと一緒に居て、小学生にあがってもよく遊んだ。だがどうしても、この年頃にもなれば異性を意識し始めるのだろう。そのせいか、由衣との距離は次第に遠くなっていった。無論険悪になったわけではない。ただ、わざわざ遊んだり、話しかけるようなことがなくなってしまった。それだけだ。

そうして由衣との距離が遠くなってから、ようやく自分の気持ちに気が付いた。本当にそうだと

自信を持って言えるわけではない。それでも他に適当な言葉を自分には知らない。

由衣のことが好きだった。

一緒にいることが当たり前で、この先もそうだと思っていて、そうでなくなつてからようやく気が付いた。ずっと由衣のために何かしてやるのだと思っていた。別に由衣には自分が必要なわけではないという事実が、心に深い空白を指し示していた。

体育祭の時も、いつ転んで泣いてしまうのかと不安になる。この年にもなつてまず転ぶ心配など要らないと言うのに。あるいは転んだところで、傷口は自分で洗えるし、ましてや泣きじゃくることもない。

修学旅行の時だって、また由衣が迷子になつたらどうしようと考えた。友達と一緒に動くのだからそんなはずはない。むしろ今の由衣は相当しっかりしているし、迷子の友人を探す役回りになるだろう。

もう、昔とは違うんだと言いつけていた。それでも心のどこかでは、確かに由衣との関係を望んでいたと思う。

夕食を終え、浴場の使用番が回ってくるのを待つ些細な時間。今日寝泊まりする部屋で、同室の男子たちの下品な笑いが聞こえてくる。それを睨むわけでも同調するわけでもなく、半分呆れたようにしながら荷物を弄るふりをしてやり過ごしていた。なんだ、誰の裸がみたいだとか、誰の身体がそそるだとか、そういうことばかり言っていて

付き合つていられない。

おいおいと肩に寄りかかつてきた一人が「なあ、颯太は誰が良いんだよ、あれか、五組の由衣と幼馴染なんだろ」と、全く品のない声色で耳元で言う。

「よせよ、重いからどけよ」

そう半笑いにそいつを除ける。酷く、気分が悪い。お前らと一緒にするなと思う。

「なんだ凶星か？ まあ顔良いからなあ。俺もな、良いと思うぜ。この前の球技大会のときよ……」腹の内から込み上げてくるような害意を確かに感じていた。あと幾らもなく、その抑えが効かなくなるだろうな、と。

自分が口を開くよりも先に部屋のドアががさつに開かれた。「次六組の番だって、はよこいって先生が言つた。俺は言つたからなさつさとしろよ」と、伝達を任されたやつと言葉を聞いて、みんな着替えを手にして部屋から出ていく。

浴場の手前の廊下で五組の生徒らとすれ違う。男子は総じて乾きのあまい短髪をそのままに走り回っているようなものだが、女子の方は言えば普段と少し趣の違う髪型に纏めている人間がほとんどで少し新鮮だった。

その中に由衣の姿を見つけた。

「あ、由衣、居た居た」

何でもないうようにして由衣に話しかける。肩より伸びているはずの髪は括られており、幾分すっきりとした印象に見えた。由衣との目線はちょうど同じくらいだった。

「あの、お風呂のあとさ、ちょっと時間ももらえない？」

「……いいけど、なんかあるの？」

「っと、それは……その」

先に行っていたクラスメートが「おい、早くしろよ、先生に言われちゃう」と言ってくる。答えずに窮した自分にとってそれは都合の良いことだった。

「まあ大したことじゃない、そうだな、エントランスの脇でいいだろ、じゃあまたあとで」

そういつて由衣の続く問いかけを振り切って浴場に向かってしまった。

全く、なんでこんなことをしているんだろう。

全員の入浴が終わって、就寝時刻までのいくらかの猶予時間。気持ち遅めにエントランスに向かえば、由衣が手持ち無沙汰そうに一人で待っていた。さつきとは違い、髪型もいつものように、あるいはそれよりも少し手が込んでいるかもしれない。綺麗な桜の意匠かわいらしいヘアピンが良く似合っていた。由衣には、よく似合っていた。

それを確認して、後ろで息を詰まらせないかと心配されて当然の様子の子に声をかける。

自分はそれを見ていた。

待ち合わせに自分ではない友人が来たことに困惑する由衣だったが、男子が何か言ったら納得がいった様子でそいつの話を聞いている。

いったい、自分は何をしているんだろう。

顔を赤らめた男子はたどたどしく言葉を紡いで、その手を由衣に差し出す。

その先を自分は、見る必要があった。それは紛れもなく自分が選んだことなのだから。それでも自分はその場を、由衣に気づかれないように後にした。

堪えきれなかった。

修学旅行が終わった後の何気ない日常の中、その時に起こったあらゆる事象は噂となって校内を駆け巡る。由衣が男子の申し出を断つたと、自分はそう伝え聞いた。

どうして、目の前に由衣が居るんだろう。そんなことがただの偶然だというのは、分かっているも、それでも。昔に置いてきたはずの感情の奔流が私を襲う。

そんな自身のこと気に取られていて、いつのまにかマイの母親は、いや由衣は目の前に居た。

「この度はうちの真衣がご迷惑を、なにより本当にありがとうございます。私が目を離れたばかりに、しかも真衣のわがままで一緒に居てくださったそうで」

「いえ、私は、この子を放っておけなかっただけで」

この応答は正しかっただろうか。後ろに一つ結びにされた肩にかかる長さの髪は、あの頃と変わらない。それでも、決定的なのはやはり。

「いえ……そうだ、押しつけがましくてあれなのですが、お時間さえよろしければランチでもいいかですか？ 何もお礼ができないのはこちらとしても心苦しいですから」

やめておくべきだと分かっている。今更、そう今更だ。全ては手遅れなんだ。この先に何も私の求めるものなどない、どこか自分を痛めつけるだけになるだろうことは想像に容易い。

「ちょうどお昼にしようかと思っていたところなんです。それに、真衣ちゃんも桜のヘアピンを気に入ってくれたようですよ」

また、私は選択を誤るのだ。

由衣と真衣に連れられて、一角にあるカフェとレストランと、その中間程度の店に入った。向かうまでの道中、由衣と手を繋いでご機嫌な真衣の姿を見て哀愁と拒絶とが同時に込み上げてくる。

席に案内されて、並ぶ由衣と真衣とに向かい合って座る。会った時から気が付いていた。だが、出された水のグラスに手を伸ばすせいで、その主張はこれまでの比ではない。何も当たり前のことだ。子供が居て、あるいはそうでなくても私たちの年代であればもはや珍しくもない。

由衣の左手、その薬指には、確かな銀の輪がさやかに輝いている。

それを私は、自分はどう受け止めればいいのか。

今更何も話すことなどないと思っていた。話せるはずがないと。私も由衣も変わってしまった。もう昔のようにはならないと。

「その、爽華さんって、ソーカさんだったりしませんか」

「ご存じでしたか。はい、その名義でやらせてもらっています」

「やっぱり！ 何回かアクセサリーも買わせてもらって、今日のイヤリングもソーカさんのやつで」
 そうしてみせられたアクセサリーは確かに私の手がけたそれと同じだった。

「ああ、ありがとうございます。こうして実際に使ってもらえていると嬉しいですね」

「中でもこの桜のモチーフのものが気に入っていて、その、これは私の話なんですけどね。昔、似たようなヘアピンを買ってもらったんです」
 そう言われて、昔のことを思い出した。ほんの些細な記憶。

自分にとつての、はじめての救いの記憶。

その日も母親と、由衣とその母親とで出かけていた。いわゆるショッピングモールで映画を見た後のウインドウショッピングの時だった。ある雑貨店で自分は桜のヘアピンを見つけた。「何見てるの」と後ろから覗き込む由衣に、そのヘアピンを指さす。

「こういうの、由衣に似合いそうだからって、思っ

て」
 咄嗟にそう誤魔化した。自分の興味がどうにもそういうものに寄っているらしいと気づき始めた年頃、つまりはそれが自身の属性にそぐわないのだという感覚が生まれてきたころだった。由衣に、どう思われるのも嫌だと思った。

試しにヘアピン頭にあてがった由衣は鏡をみて「かわいいねーこういうの好きかも」と漏らす。きつと自分は、すべて顔に出ていたんだらうと思

う。鏡越しに由衣と目が合った。「颯太も付けてみる？」と。

煮え切らない回答が歯切り悪く、何を言っているのか「いや、自分には」とでも言うつもりだったか、そんな自分を「まあまあまあ」とお構いなしに由衣に背中を押されて気が付けば目の前に姿見があった。

そつと、由衣の手が後ろから伸びてくる。その手の先には桜のヘアピンがつままれていて、「ほら、かわいいじゃん」と、由衣はそう言った。

その一瞬を生涯忘れなどしないだろうなど、そう思っていた。なのに今になってようやく思い出した。私の、初めの一歩を押してくれたのは違はなく由衣だったはずなのに。

「小学校の頃なんですけど、小さな雑貨屋さんでお友達とお揃いで桜のヘアピンを買ったんです。その子はそれが欲しくて仕方なさそうだったのに、だからお揃いで買ってもらうようになって、そういつて親にねだったんです。その子はヘアピンとかあんまりしないので、その後しばらく私は事あるごとに付けてたんですけどね……大事なときとか」

十年以上の月日を超えて、真意によくやく気が付いた。全てが終わって、どうしようもなく変わってしまっただけから気が付いた。

「宝物だったはずなのに、結婚する時の引越して失くしちゃって。そのときソーカさんのアクセサリーを見て『これだ！』って、あの子が気に入る

ようなものばかりだなあって」

由衣は隣で退屈そうに待つ真衣の頭を撫でて続けた。

「私はその子のことが好きだったんです。でもあの子は、そんなことなかったのかもなって。好きなのは女の子じゃなくて男の子の方だったのかもれないって。まあもう結婚もして子供も居ますから。いい思い出って言っちゃえばあれなんですけど」

あの時から何一つだって変わっていなかったんだと、ようやく理解できた。ただ自分の選択が上手いかなかっただけで、何一つ、由衣は何一つだって、もともと私のことを分かっていたと聞いていたじゃないか。

それは些細な積み重ねだった。ある時に、自分の好きなものが周りの子と違うことに気が付いた。周りからの扱われ方に違和感があった。

決定的だったのは第二次性徴。それまで差異が無かったはずの身体は、二種類の定形へと変形していく。持ち主がそう望むか望まないかに関わらず、変わっていく。

自分の身体は弾力を失い、薄汚くなっていく。肌は艶を失い、体毛は濃くなる。いくらかその時が遅かったのは救いか、あるいは逃れられない絶望を突き付けられる苦痛だったか。

次第に喉の心地が悪くなっていく。障害物を声帯に埋め込まれたように、通るような軽い声は失われていった。

そういうことは、そう珍しくないのだと言う。けれど自分のものがそのような典型ではないと感じていた。

些細な同性からのスキンシップに対する抗いがたい嫌悪感に、何度耐え、あるいは何度その手を跳ね除けてしまっただろうか。

一体あの頃にどれほど浴室で泣いただろうか。自分の替えの効かない唯一の身体が、書き換えられていく。一生付きまとう呪いが形を成していく。奪われていく。

自分が自分でなくなっていく。

ようやく大人になってから、自分は私を拾いなおせるようになった。曖昧で、歪み続けていく自身の輪郭に振り回されて、精神が疲弊し続けるあの日々ではその苦痛を耐え凌ぐだけで精いっぱいだった。こんな自身が周りに受け入れられるとも信じていなかった。ようやく、自身の形が見つけられるようになって、私は自身で在り方を選び始めた。

ようやく自身で納得いく形で生活できるようになって、それでも寂しさと後悔とが残っていた。ただ由衣のことを想っていた部分だけが空っぽのままだった。

「すいません、私のことばかり話してしまって」

由衣もきつと分かってくれないだろうと、勝手にそう決めつけていた。だから、由衣のことを忘れられなかった。もし自分がもっと普通だったらと。

周りの男子と変わらない存在だったら。私ではなく自分のままだったら、もしかしたら、由衣とずっと居られたのかもしれないと考えて、自身の選択を後悔だっただけ。

でも、由衣は初めから私を受け入れてくれていたんだ。

「いや、どうやって誰かの思い出になれてるのは、ちゃんと聞けるとこんなに嬉しいんですね。むしろ私の方こそ感謝したいくらいで」

会計を済ませて共に店を出る。由衣と真衣と別れる時が来た。

由衣は私のことに気が付かないだろうが、それでいい。今の由衣には真衣が居る。もし由衣が私のことを視てくれていたとしても、それは私だ。自分じゃない。

真衣の頭には可愛らしい桜のヘアピンが付いている。本当によく似合っていた。事あるごとにあのヘアピンを付けていた由衣を思い出す。ときおり、桜が髪で隠れていないか気になるのか位置を正していたあのころの由衣の様子が、今あの可愛らしいヘアピンが自分の頭の上についているのだという事実こそわさわわしている真衣の様子はそっくりだった。

「ふふ、気に入ってくれて良かった。たくさん使ってあげてね」

真衣の前にしゃがみ込んでそう微笑みかけると、たつぷりの笑顔でうん！と頷いた。そのことに気が付いた由衣が「本当にいいんですか？真衣のことでご迷惑おかけしているのに」と、当

然の反応かもしれない。

「いいんですよ。私も昔のことを思い出してたんです」

立ち上がって、肩掛けの鞆を背負いなおす。長居はしなくていい。

「また気に入ったものがあればぜひ買ってあげてください」

「ええ、真衣もよく気に入っていますから。もちろんですよ」

「そのご友人様もしかしたら私の作品を迎えてくれているかもしれません。小さいころから憧れていたものを実際に作る立場になって、こうして私の作品が他の子の思い出になるのは本望ですから」

もう大丈夫だ。いつかの自分のことを、これ以上憐れむことはない。あの時の自分から地続きに在る今の私のことだっけ受け入れられる。

大切だった人は、もう他に大切なものを持っていた。それでも、昔のことを蔑ろになどしていなかったと。あの頃から、私は私で居ても良かったんだと。そう教えてくれたから。

「また、ぜひ私の作品をよろしくお願いしますね」

臉に日差しが当たって意識が上がる。

洗面所で顔を濡らして、いくつかの化粧品で肌を整えて、髪も梳かして後ろに括る。

そうだ、とそれは朝の未だ覚束ない思考を解きほぐすように浮かんでくる。

棚の奥に大切にしまっていた小物ケースから、この歳ではもう付けることはないだろうチープでかわいらしいヘアピンを取り出した。

昨日買ったばかりの茶の新しい手帳。その背表紙近くにヘアピンを差す。

小奇麗に整えた机の上に置けば、窓から射す緩やかな朝日が明暗を与えて、桜のピンク色がよく映えていた。

コメント

爽華はふと迷子の女の子を見つけます。その姿はいつかの幼馴染に似ていてどうしても放っておけず、ならばその子の親と遭遇するのも道理でしょう。その子の親こそが爽華の幼馴染であり、およそ十年ぶりの再会を果たします。

しかしそれだけの時が過ぎればお互いに人生は変わり、それを前にした主人公たちはそれまでのお互いを、あるいは自身をどう思うのでしょうか。私はと言えば、ずっと昔のささやかな甘い記憶を握りしめ、それが都合のよいように歪んでいることに気が付いているのに、いざそうなれど手放すことができなかつたのですが。

私のこよなく愛する作家は「読んだ方の心に残る物語を書きたい」と、そして私もまたそう思うのです。私の作品に未だそれだけの力があるかは定かではありません。ですがそうは至れずとも、「読んだ方の心を動かせる物語を書きたい」と、尊敬を込めてそう思います。そしてこの作品がそうあることを願って、そうあれば嬉しく思います。